

・特集・ 宮城県図書館を核とした次世代育成の試み
 —— H19. 文部科学省 地域に役立つ図書館サービスモデル事業 ——



写真：開館前、朝の書架整理。カタカタと本の音が響きます。

図書委員だった

柏葉 幸子

小学校の頃、ずっと図書委員だった。教室二つ分くらいの大きさの図書室の、どの棚にどんな本があるか、誰がどんな本を借りていったかまで把握していた。

学校の図書室を私物化するように、いりびたっていた。貸し出し期間を守らない子がいると、その子の教室までいって、サラ金の取立屋のごとく、はやくかえせと催促した。貸し出された本が、書架にもどると、安心した。自分が読みたい本でもないのだ。

司書の先生に教えてもらって、本の背表紙をはりかえたり、金色のインク？がでるペンで、背表紙に書名を、書き直したりもした。あの頃も今も、ものすごい悪筆なのに、わくわくする仕事だった。本にかかわっていれば、満足している子どもだったのだと思う。大人になっても、やはり本にかかわっている。気持ちは、今も図書委員のままだ。